

猛威をふるうインフルエンザ。感染を疑い夜間・休日に救急外来を受診する人も少なくないが、高齢者など重症化するリスクが高い人を除き「インフルエンザ治療薬は原則処方しない」とする病院が増えていく。感染の有無などを調べる迅速検査を行わない救急外来もある。不要不急の受診をできるだけ控えてもらい、ほかの重症患者の治療を優先させるためだ。

1月下旬の土曜の夕。愛知県一宮市の一宮西病院の救急外来待合室は、訪れた患者で大混雑していた。30代女性は風、ろから39度の熱があり、救急科の安藤裕貴部長にだるさや関節痛を訴えた。安藤部長は「インフルエンザの疑いが強い」と診断。ただ持病がなく重症化の恐れが低いことから、「多くの人は自然に治ります」と説明し、治療薬ではなく解熱剤を処方することに決めた。

同病院では2018年12月に救急外来でのインフルエンザへの対応方針をまとめ、壁に貼らした。「高齢者や持病がある人などを除けば治療薬は原則処方しない」と説明。普段健康で比較的リスクが低い人には「思いやりの気持ちで受診を控えて」と求めている。

患者数昨年年の1.5倍 背景にあるのが、冬場の患者の増加だ。気温の低下に伴い、持病を悪化させたり、体調を崩したりして、救急外来を受診する人が多くいる。加えて、今年も地域でインフルエンザが大流行。同病院救急科の1月の1日あたりの平均患者は、昨年比で5割増の約300人となった。重症患

# インフル薬「出しません」



一宮西病院は救急外来でインフルエンザの対応方針を掲げている（愛知県一宮市）

## 他の重症患者を優先

### 救急外来 普段健康なら検査せず

状をおおむね1日程度短くするとされるが、そもそも発症から48時間以内に服用しないと効果は期待できない。発症初期に感染しているかどうかを診断するのは難しく、投与が間に合わないこともある。下痢や吐き気などの副作用が生じる場合もある。

18年3月には1度の服用でウイルスの増殖を抑えるという新薬「フルミダール」が発売された。手軽にウイルスの減少スピードが速く、診療所などの処方幅が広がっている。

「正しく言うと、インフルエンザ」――。神戸市立医療センター中央市民病院（同市中央区）は「処方したホスタールを救急外来に貼り、ホームページでも掲載している。綿棒で鼻水を採取して調べる迅速検査や、治療薬の処方はいまだに原則行わない」と宣言する内容だ。

救急科の松岡由典・副院長は「診療の標準化と患者とのトラブルを回避するため」と説明する。以前から迅速検査を求められ、重症化するリスクが低いと判断した場合

はかかりつけ医などを受診するように促してきた。ただ医師の対応にばらつきがあり、トランプを生みかねなかった。このため感染症内科や感染制御チーム（ICT）とともに話し合っ

「正しく言うと、インフルエンザ」――。神戸市立医療センター中央市民病院（同市中央区）は「処方したホスタールを救急外来に貼り、ホームページでも掲載している。綿棒で鼻水を採取して調べる迅速検査や、治療薬の処方はいまだに原則行わない」と宣言する内容だ。

科医の負担が増大し、諦める医師もいた。周辺医療機関との共同調査で、救急外来の受診者の大半が軽症とも判明。緊急を要する患者の受け入れが不可能になる懸念があり、こうした方針をとっている。

日本感染症学会が毎年まとめた治療薬使用に関する提言は、基礎疾患のない人も重症化して死亡する例があると指摘。こうした病院の対応を推奨しているわけではない。同学会インフルエンザ委員会の石田直委員長は「普段健康な人への治療薬投与については「医療界でも意見が分かれている。患者の状態を見ながら判断すべきだ」と話す。11年以降の知見などを踏まえ、19年中に新たな提言をまとめるという。（藤井持大）

医療・健康面の記事やコラムに関するご意見、情報を募集しています。ファクス（03・6256・2770）か電子メール（iryou@nex.nikkei.co.jp）でお寄せください。